

カンボジアの 24色の クレヨン

柳原和子



カンボジアの24色^{しよく}のクレヨン

一九八六年一月二〇日初版
一九八七年一月三〇日二刷

著者 柳原和子

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一・二二

電話東京二五局四五〇一(代表)・四五〇三(編集)

振替東京六一六二七九九

壮光舎印刷・サンニチ印刷・美行製本

© 1986 Kazuko Yanagihara

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〈検印廃止〉 落丁・乱丁本はお取替えいたします。

著者について

柳原和子(やなぎはら・かずこ)

一九五〇年東京生まれ。東京女子大学社会学科卒業。八四年、芸術祭参加ドキュメンタリー番組『望郷のキャンパス』(中京テレビ)の制作に携わる。八〇年、八二年、八五年、写真展『虚空へ』(PART1・2)を開催。著書に『夢遍路』(皓星社)ほか。

カンボジアの 24色の クレヨン

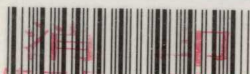
柳原和子



I313.55
J430

ISBN4-7949-5735-1 C0036 ¥1600E

埼玉県立久喜図書館



11595694

カンボジアの 24色のクレヨン

柳原和子



晶文社

ブックデザイン 平野甲賀

絵 チョムリス・ウン

写真 著者

カンボジアの24色のクレヨン

目次

はじめに 11

チヨムリスからの手紙 19

瓦礫の故郷 28

ペン夫人の丘 43

死の村 62

別離 86

ワット・アイクの詩 113

牢獄 128

日常 142

幻の建設 158

逃亡者 170

家族 193

再生 213

国境の川 233

望郷 251

チヨムリスからの手紙 267

あとがき 274

善いは悪い 悪いは善い

—— シェークスピア

心が幻想でみたされると

心はそれを糧にして残忍になり

それは愛よりも

憎しみのなかに形をとっていく

—— W・B・イェーツ



はじめに

はじめに

一人のカンボジア難民の少年が、十七枚のクレヨン画を描いてくれた。

一九八〇年一月、カンボジア国境からタイ領内に二キロの地点のカオイダン難民収容センターで、私は彼に出会った。当時十四歳だった少年の名は、チョムリス・ウン。完成したばかりの野戦病院で間欠的に襲う激しい頭痛と微熱に苦しむ患者の一人だった。病院のボランティアスタッフとして国境に滞在していた私は、バンコクの大丸デパートで買い求めた日本製の24色のクレヨンや文房具、折り紙、画用紙、それに当時NHK特派員であった園田矢夫妻の協力で集めた日本語の絵本などを野戦病院に運びこんでは、難民の子どもたちと遊ぶ日々を過ごしていた。

チョムリスと出会うきっかけを作ってくれたのは、私の幼ない遊び友だちの一人チョミディ・ウンである。チョミディはチョムリスの弟で九歳。兄に付き添って病院に寝泊りしていた。

チョムリスは、栄養失調による發育不全のせいもあり、他の子どもたちと同じように、年齢よりかなり幼なく、十歳くらいにしか見えなかった。鉄棒にベニヤ板を置いてゴザを敷いただけのベッドにうずくまっていた。彼は弟の呼びかけで、ゴザの下から数枚のクレヨン画を引きずりだし、私に見せてくれた。

彼はほとんど英語を話すことができなかった。私が少しでも詳しい質問をしようとすると、「ごめんなさい、ぼくはあなたの言葉が理解できません」と口ごもる。聞き手の反応も構わず、自分たちの悲しい体験を多弁に訴えようとする他の多くの大人の難民と、それは対照的な語り口であった。彼はただひと言、「ぼくは見た」と繰り返すばかりであった。

チョムリスは、夜になると絵を描いた。闇と静けさの中で、かすかに漏れる明かりをたよりに、一枚、また一枚とベツトの上で描きつづけ、夜明けとともに、ぐったりと疲れ、頭痛に苦しみ、毛布にくるまって眠った。彼が私に手渡してくれた絵は、毎朝の挨拶がわりだった。そして、私の手元には合計十七枚のクレヨン画が残ったのである。

一カ月半の国境滞在を終え、私は帰国した。再会を約束して別れたのだが、再び国境を訪れた同年六月、彼の姿はカオイダンから消えていた。タイ政府の方針で、多くの難民がカンボジアに強制送還されたり、他のキャンプに移動させられたりしており、折りからのベトナム軍とタイ軍との国

境線上の戦闘による混乱も加わって、チョムリスとの再会は絶望と思われた。ただ一つの望みがあるとすれば、彼がフランスかアメリカかオーストラリアに運よく定住が認められ、他のキャンプに移っているかもしれないということだった。しかし、第三国定住出国者リストに彼の名前はなかった。

その後二年あまり、私はさらに二度タイ国境を訪れ、彼を探した。タイ国境警備隊の二人の将校も個人的に搜索を手伝ってくれたのだが――すべては徒労に終わった。

一九八二年十月のことだった。私は友人の写真家野中章弘氏からの連絡で、チョムリスと彼の家族がすでにアメリカに渡っていることを知った。バンコクの国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の定住出国者リストに彼ら一家の名前が載っていたのである。中京テレビ（日本テレビ系列）ワシントン支局に追跡調査をお願いし、彼のアメリカの住所をつきとめることができた。

そして一九八三年三月、私は国際電話でチョムリスの声を聞いた。

電話に出た彼の声は、変声期を過ぎたたくましい青年のものに成長していた。しかも、彼の英語はとてもうまくなっていた。

チョムリスと共同で一冊の本を書きあげたい、と考えたのはそのときだったと思う。

折り返し、彼から手紙とアメリカで描いた絵やデッサンが送られてきた。何度か英文による書簡を交わした後、一九八三年暮れから八四年一月にかけて、私は厳寒のアメリカ合衆国ミネソタ州レイクビル市を訪れた。亜熱帯生まれの一家八人は、零下四十度、十分間も外気に触れていると凍傷

になるという極北の地で、身を寄せ合ってひっそりと生活していた。

約一カ月間、私は近所のホテルに宿をとり、ミネソタ在住の留学生日高威靈宮氏の協力を得て、彼の生いたち、絵の背景となる体験などについて英語でインタビュした。帰国後、インタビュの内容を約二百枚の日本語による物語に構成し、再び英文に翻訳してチョムリスの確認を受けた。その際の翻訳料は、この物語を原作にして、一九八四年度芸術祭参加ドキュメンタリー番組「望郷のキャンパス」を制作するという条件で、中京テレビ放送局が支払ってくれた。

この番組の制作は、地方局である中京テレビにとって、かなりの冒険だった。制作費用、テーマの硬さ、愛知県との関連のなさ――すべての点において現代のテレビ界の風潮からもっとも遠い条件を備えた企画だった。その悪条件をおして、制作に踏みきることができたのは、ひとえに渡辺潤報道部長と樋口由紀雄ディレクターの熱意による。

制作は一九八四年五月にはじまった。東南アジアにおける取材のコーディネートは、日本電波ニュースが担当した。ベトナム戦争末期らしい、ベトナム、カンボジアで取材をつづけてきた岩田力三カメラマン、稲垣宏一技術担当スタッフの適切な忠告は、ともすれば暴走しがちな私の取材行動を軌道修整する基軸となった。

私にとって何よりも幸運だったのは、制作班一行のなかに細川美智子さんという通訳を迎えたことである。細川さんは、今から約二五年前、日本に留学していたカンボジア人と結婚し、その後カンボジアで生活し、ポール・ポト時代を奇跡的に生きのびた二人の日本人女性のうちの一人である。

ボル・ポト時代、彼女はカンポート州ワット・ロバック村のサハコーで強制労働に従事した。ロン・ノル政府時代に上級公務員だった夫は処刑された。二人の子どもを育てながらボル・ポト時代を過ごした彼女の体験については『カンボジアの戦慄』（朝日新聞社刊）に詳しい。一九七九年のベトナム軍のカンボジア進攻後、ベトナム政府の協力で助けだされた彼女は、現在、東京都世田谷区で二人の子どもたちと共に生活している。

一九八四年八月、私は同番組制作班一行五人とミネソタに同行して、三たびチョムリス・ウンと会った。私とチョムリスは、細川さんの通訳で、双方にとって不確かな英語ではなく、彼の母国語であるクメール語と日本語で話をすることができた。それによって、私はまだ見ぬカンボジアの風土、国民性、想像力の及ばぬサハコーでの生活や、チョムリスのおぼろげな記憶を、くつきりと再現できた。また、細川さんの通訳は、学生気質が抜けず、観念的な論議に流れがちな私のインタビュに現実感を与えたのはいうまでもない。

チョムリスとのインタビュは、その日のうちに原稿に起こし、翌日、不明な点を確認しなおしてつぎに進むという方法で行なった。そうしたインタビュを三週間、連日休みなくつづけ、チョムラン、チョムロス、チョミデイの三人の利発な妹や弟も、彼の記憶のふたしかな部分を補ってくれた。

彼の両親、チャイ・ウンとキムホイ・アン夫妻は、最初、自分たちが証言者となり、息子たちの名前が世間に明らかにされることに強い抵抗を示した。息子の実名入りの本を出版することに対し